

## 親子関係の相互認知 III

(新データによる項目分析)

辻岡美延・小高 恵

MUTUAL COGNITION BETWEEN CHILD AND PARENTS: PART THREE

(An analysis of new data)

by

Bien TSUJIOKA and Megumi KOTAKA

### Abstract

Kojima's Japanese adaptation of Schaefer's Children's Report of Parental Behavior Inventory and its modification for parents (Parent's Report of Parental Behavior Inventory) and the EICA constructed by Tsujioka and Yamamoto were administered to Japanese junior high school students (N=236) and their parents (N=198). Correlation matrices of 208 items were analyzed by Procrustian factor analysis to get more congruent and homogeneous hexis scales of parental behavior between children and parents.

Twelve hexis scales, each includes both parents and children, were constructed and the correlation matrix of the above 24 scales (N=198) was factor analysed, and followed by Varimax, Promax, and Rotoplot rotations. Seven oblique primary factors were obtained and interpreted in terms of factor patterns of 24 hexis scales and also of those of 208 item scores derived from extension factor analysis.

Three paired primary factors were Emotional Support, Emotional Control, Extreme Autonomy which were linearly independent for children and parents but named by the same titles. There was another common factor, "Identification", which was included in both Children's and Parents' Reports.

Three second-order factors were obtained: 1) Acceptance, involving Emotional Support (by both child and parents) and Identification, 2) Emotional Control, involving Emotional Control (by both child and parents) and Identification, and 3) Extreme Autonomy, involving Extreme Autonomy (by both child and parents).

Key Words : Parents-Child relationship, Procrustian factor analysis, Japanese junior high school students, Emotional Support, Emotional control, Extreme Autonomy, Acceptance, Autonomy, Identification

### 抄 録

親の養育態度の等質的な習性水準尺度を得るために、236名の男女中学生とその両親198名に施行された Schaefer の18尺度、192項目からなる質問紙 CR-PBI (From-II) とその中に含まれていない、辻岡、山本(1976)が作成した親子関係診断尺度 EICA の項目とを合成させた208項目がプロクラステス因子分析によって分析された。

24個の習性水準尺度(親12尺度 子ども12尺度)が構成され、その習性水準尺度間の相関行列が因子分析され、Varimax 回転、Promax 回転、および、Rotoplot 回転により回転された。7個の斜交因子が得られ、解釈は24個の習性水準尺度の因子パターンと延長因子分析によって得られた208項目の因子パターンの2つによって行われた。

7個の一次因子尺度として、子どもと親とに同名の、両者間で中程度に相関しつつ、一次独立である3組の因子(情緒的支持、感情的統制、放任)と、子どもと親の報告に同時に負荷する共通因子としての「同一化」の因子が得られた。

二次因子分析においては、親側の情緒的支持と子ども側の情緒的支持の一次因子と、同一化の因子が二次の受容の因子に統合され、親側の感情的統制と子ども側の感情的統制と同一化の一次因子が二次の感情的統制の因子に統合された。親側の放任の因子と子ども側の放任の一次因子は二次の放任の因子に統合された。

キーワード : 親子関係, プロクラステス解法, 情緒的支持, 感情的統制, 受容, 放任, 自律性, 同一化

〔問 題〕

Schaefer, E. S. (1965a) は子どもの認知する親の養育態度を研究するために尺度を開発した。彼は、自分の尺度を CRPBI (Children's Report of Parental Behavior Inventory) と呼んだ。彼はその報告が女子であろうと男子であろうと、また、その報告が母親に関するものでであろうと父親に関するものでであろうと、同じ質問紙を用いることが可能であることを見いだしている。また、Schaefer, E. S. (1965b) は CRPBI を因子分析し、「受容対拒否」、「心理的自律性対心理的統制」、「厳しい統制対甘い統制」の3つの因子を見出した。

Renson, G. J., Schaefer, E. S. & Levy B. I. (1968) は CRPBI のフランス語版をベルギーの高校生に行った。これらの因子分析の結果は、親の行動の概念モデルが国家間においても妥当することを見出ししている。また、Schludermann, E. & Schludermann, S. (1970) は、Schaefer のオリジナル版と同じ情報を定義しうる CRPBI の短縮版を作成し、調査を行い、その結果、CRPBI の改訂版が基本的に Schaefer のオリジナル版と同じ情報を規定していることを示している。

'80年代に入り、Schwarz, J. C., Barton-Henry, M. L., Prunzinsky, T. J. (1985) らは、母親、父親、子ども、子どもの同胞のそれぞれに短縮版の CRPBI を評定させ、その比較を行っている。その結果、母親については3因子構造を示しており、四者の間でそれぞれ対応していた。しかし、父親については、父親以外の評定者では非常に類似した3因子構造になっていたが、父親が自分自身を評定する場合には、厳しい統制の因子が2因子に分離されていた。

一方、わが国においては、品川不次郎 (1958) らの「田研式親子関係診断テスト」が最も有名であるが、Schaefer の CRPBI から出発した小嶋の研究 (1969) や辻岡・山本の一連の研究 (1975, 1976, 1977a, 1977b) も代表的なものとしてあげられるであろう。辻岡らの研究においては同一化の因子の存在が確かめられているが、特に、「子どもに対する親の行動」という親子の相互認知に関する辻岡・山本の研究 (1977a) では、親と子どもとの「へその緒」、すなわち、分身的愛の強度を測定すると考えられる ID 因子の存在することが強く提案されている。そして、辻岡・山本 (1976) は、父一息子、父一娘、母一息子、母一娘の4種のいずれにおいても転移可能性を保持するような質問紙「親子関係診断尺度 EICA」を因子的真实性の原理のもとで作成している。さらに、辻岡・山本 (1977b) は、この質問紙を用いて、親の養育態度と子どものパーソナリティ特性との関係についての研究を発表しており、出生順位によって親の子どもに対する養育態度が異なること、また、出生順位イコール心理的位置とはならないことを明らかにしている。この研究においては、先行変数として出生順位、後続変数として人格特性を、仲介変数として親子関係の次元をとりあげることにより、出生順位 (先行変数) と親子関係 (仲介変数) そして、親子関係 (仲介変数) と人格変数 (後続変数) のそれぞれの間に関係が示され、

仲介変数なしでは、直接、先行変数である出生順位と後続変数である人格特性の間では有意な関係はみいださすことができないことが述べられている。

森下（1982）は、EICA を中学生に施行し、中学生における親の養育態度と対人特性の同一視に関する研究を行っている。それによると、男子については、父親を拒否的であると認知しているとき、その父親の独立性が高ければ高い程、子どもの独立性も高く、母親を拒否的と認知している程、その子どもたちはわがままで、不親切で、母親自身もそのような傾向があり、その母親がわがままで、不親切であればあるほど、子どももわがままで不親切であるということ、一方、女子においては、父親を受容的とみているとき、父親が世話好きであればある程、子どもも世話好きであり、母親を受容的とみている場合、その子どもはわがままであるが世話好きであり、母親がわがままであればある程、子どももわがままであるということが示されている。また、森下（1990）の研究においては、小学生、中学生、大学生を対象に EICA の「情緒的支持の尺度」と「統制の尺度」、自己受容に関する項目を用いて、親の養育態度と子どもの自己受容の発達の研究を行っている。それによると、小学生女子については、父親、母親の情緒的支持が強いほど、「自信」の得点が高く、「自己拒否」の得点が低く、統制が強いほど、「自信」の得点は低く、「自己拒否」の得点は高いということが示されている。また、中学生については、父親、母親の情緒的支持が強いほど、「自己承認」の得点が高く、大学生の場合、父親の情緒的支持が強いほど、男子は「自己理解」の得点が高く、女子は「自己理解」と「自己評価」が高く、「自己拒否」の得点が低いという結果が示されている。

このような親子の特性間の交互作用の問題を解明するためには、やはり親用と子ども用の診断尺度の確立が望まれる。このような目的をもって本論文においては、辻岡・山本の研究（1977 a）によって提案された、ID因子を含めた7因子を測定するための項目群を子ども側のみならず、親側の報告についても「転移可能性の原理」と「因子的真実性の原理」によって内容的には同一の項目からなる尺度を作成することを目的とするものである。

## 〔方 法〕

### 1. 資料

中学生男子113名、中学生女子 123名、計 236名とこれらの生徒と対をなす完全な資料の得られた彼らの父親、母親それぞれ99名を分析のための資料として用いた。

### 2. 質問項目

Schaefer の18尺度、192項目からなる質問紙 CR-PBI (Form-II) と重複項目を除いて前者に含まれていない辻岡・山本（1976）が作成した親子関係診断尺度 EICA の項目とを合成させた208項目を用いた。

### 3. 分析手順

#### I 習性水準尺度の構成

① 子ども→親(472組), 親→子ども(198組)について, それぞれの208×208の項目間相関行列を算出した。

② これらの2種の相関行列の固有値をもとめ, Scree Test(辻岡・東村1975)により, 因子数を15個と定め, 主成分分析を行った。

③ 親側の因子パターンができる限り子どもの構造に近似するように, 子ども側のサンプルの主成分分解を標的行列として親側の主成分分解に対して Schönemann のプロクラステス法を適用し, 得られた親側の近似解と標的であった子どもの主成分分解とを併せた超行列を同時に Varimax 回転した直交15因子を求め, さらにこれを Promax 法で斜交回転をし, 斜交解を求めた。この方法は所謂, 通比較(Over-all comparison)に該当する。

④ 上記で求められた15因子のうち, 親と子の双方に0.3以上の負荷を示した同一内容の項目を選択した。(なお, 15因子のうち, 12因子までが両者に共通している項目が存在したが, 残りの3因子については親と子どもに共通する項目は存在しなかった。)

以上の手続きにより, まとめられた尺度は24尺度(子ども12尺度, 親12尺度)であり, 含まれる項目は176項目であった。

#### II 因子数の決定と因子分析

上記で選択された尺度を用いて, 子どもから親(12尺度), 親から子ども(12尺度)の合計24尺度についての相関行列を求める。辻岡・東村(1975)の Scree test, Scree graph を用いて, 因子数を7個に定め, 因子分析を行い, 主因子解を Varimax 法, Promax 法, 及び, Rotoplot 法で回転した。得られた準拠構造行列, 及び, 一次因子間相関行列は Table 1, Table 2 に示した通りである。

#### III 項目分析

IIで述べた斜交7因子から延長因子分析(extension factor analysis)を行い, 一次因子に対する全項目の項目得点のファクターパターン行列を求めた。

この方法の基礎は, 項目変量の因子構造が項目変量と因子得点との相関係数であることにあ

Table 1 一次準拠構造行列

習性水準尺度		一次因子	ES-C	ES-P	CO-C	CO-P	EA-C	EA-P	ID
子ども側の尺度	1 受容の尺度		606	-057	-115	-037	-040	005	128
	2 自律性の尊重の尺度		476	081	028	046	231	-007	-189
	3 子離れ不全の尺度		327	-246	225	-152	187	-054	370
	4 拒否の尺度		-101	-022	715	-005	234	-009	023
	5 不快感情の表出の尺度		-003	098	670	005	-081	135	-127
	6 強制の尺度		049	000	481	066	108	-121	017
	7 一貫しないしつけの尺度		-237	-035	471	-015	076	042	-084
	8 愛情の尺度		269	092	-379	120	018	049	-077
	9 過干渉の尺度		018	-197	335	-061	072	-208	328
	10 利己的な甘やかしの尺度		-017	-102	149	-066	498	-108	163
	11 自由放任の尺度		070	031	-055	078	483	130	-116
	12 共働の欠如の尺度		-477	082	-057	-015	367	-035	053
親側の尺度	1 受容の尺度		058	743	068	009	-095	040	231
	2 自律性の尊重の尺度		-068	537	-008	041	178	-052	-104
	3 子離れ不全の尺度		-038	201	-104	-021	-051	143	477
	4 拒否の尺度		-091	-083	-043	742	-050	211	048
	5 不快感情の表出の尺度		070	086	094	641	-089	-054	-289
	6 強制の尺度		-131	124	010	487	090	-095	151
	7 一貫しないしつけの尺度		-179	-082	-137	502	021	-007	-114
	8 愛情の尺度		270	179	152	-430	-058	112	-027
	9 過干渉の尺度		-100	106	-078	232	049	-025	418
	10 利己的な甘やかしの尺度		025	-074	-004	170	-087	634	234
	11 自由放任の尺度		-098	047	036	-064	106	534	-027
	12 共働の欠如の尺度		-049	-103	-091	-067	158	034	-123

Decimal points omitted.

Table 2 一次因子間相関行列

		ES-C	ES-P	CO-C	CO-P	EA-C	EA-P	ID
子ども側の情緒的支持	ES-C		256	-339	006	010	-145	235
親側の情緒的支持	ES-P	256		-020	-013	006	-074	279
子ども側の感情的統制	CO-C	-339	-020		300	009	-033	290
親側の感情的統制	CO-P	006	-013	300		007	027	309
子ども側の放任	EA-C	010	006	009	007		312	121
親側の放任	EA-P	-145	-074	-033	027	312		-020
同一化	ID	235	279	290	309	121	-020	

Decimal points omitted.

る。すなわち、

$$(1) V_{fs} = \frac{1}{N} Z'F$$

によって表される。(1)式において、 $V_{fs}$  は項目の因子構造 ( $n \times m$  次:  $n$  は項目数,  $m$  は因子数を表す),  $N$  は被験者数,  $Z$  は項目の標準得点行列 ( $N \times n$  次),  $F$  は因子得点行列 ( $N \times m$  次) である。そして、この(1)式によって求められた項目の因子構造から項目のファクターパターン行列  $V_{fp}$  ( $n \times m$  次) を求める。すなわち、(1)式の  $Z$  に  $Z = FV_{fp}' + UD$  を代入し、展開すれば、

$$\begin{aligned}
 (2) \quad V_{fs} &= \frac{1}{N} Z'F \\
 &= \frac{1}{N} (FV_{fb}' + UD)'F \\
 &= \frac{1}{N} V_{fb} F'F + \frac{1}{N} DU'F \\
 &= V_{fb} C_f
 \end{aligned}$$

となる。ただし、 $U(N \times n)$  は独自因子得点行列、 $D(n \times n)$  は独自因子パターンを対角項にもつ対角行列、 $C_f(m \times m)$  は因子間相関行列である。そして、この(2)式によって、

$$(3) \quad V_{fb} = V_{fs} C_f^{-1}$$

が得られる。

なお、この項目分析は辻岡・清水(1975)の因子的真実性の原理による項目分析のためのコンピュータ・プログラムを用いて行った。

## 〔結 果〕

### I 習性水準尺度の結果

次に示す項目は、習性水準 (hexis level) の尺度 (24尺度) を構成する項目群 (176項目) である。項目数が多いために、各尺度の代表項目を挙げるにとどめた。項目の左側の HD, RE 等は Schaefer の元尺度の略号、ゴチックの ES, ID 等は EICA に含まれる項目である。

#### (1) 習性水準尺度の項目例

##### ① a 子ども側の拒否の尺度 26項目

HD 私のことをいらいらさせる子どもだと文句を言う。

RE 親を困らせるようなことを私がすると、よくはらをたてる。

CG 私がいうことをきかないと、恩知らずだと考える。

##### b 親側の拒否の尺度 26項目

HD いらいらさせる子どもだと文句を言う。

RE 私を困らせるようなことを子どもがすると、腹をたてることがよくある。

CG 子どもがいうことをきかないと、恩知らずだと思ってしまう。

親子関係の相互認知Ⅲ（辻岡・小高）

- ② a 子ども側の受容の尺度 17項目  
ES 心配ごとをじっくり聞いてくれるので気持ちが楽になる。  
AC たいてい、暖かい親しみのある調子で、私に話しかける。  
AC 私と話し合いをするのがすきだ。
- b 親側の受容の尺度 17項目  
ES 子どもの心配ごとを聞いて、気持ちを楽にしてやる。  
AC たいてい、暖かい親しみのある調子で、子どもに話しかける。  
AC 子どもと話し合いをするのがすきだ。
- ③ a 子ども側の自由放任の尺度 9項目  
NO 私が与えられた仕事をしなくても、やかましく言わない。  
AU 夜でも、私が行きたいときはいつでも外出させてくれる。  
NO 私が良くないことをいろいろしても、見逃す。
- b 親側の自由放任の尺度 9項目  
NO 子どもが与えられた仕事をしなくても、やかましく言わない。  
AU 夜でも、子どもが行きたいときは、いつでも外出させてやる。  
NO 子どもが良くないことをいろいろしても、見逃す。
- ④ a 子ども側の一貫しないしつけの尺度 7項目  
IC 親は、自分でつくったきまりをすぐ忘れてしまう。  
IC 私が同じことをしても、あるときは叱り、あるときは放っておく。  
IC そのときの気持ちしだいで、きまりを押し通したり、ゆるめたりする。
- b 親側の一貫しないしつけの尺度 7項目  
IC 自分でつくったきまりを忘れてしまうことがある。  
IC 子どもが同じことをしても、あるときは叱り、あるときはつい放っておく。  
IC そのときの気分しだいで、子どもにきまりをおし通したり、ゆるめたりする。
- ⑤ a 子ども側の過干渉の尺度 7項目  
IN 私が学校や遊びでなにをしたかを、いつも知ろうとする。  
HC 私がどんなふうに行動したらよいかを、いつもいいきかせる。  
IN 外のできごとをなんでも話さないという。
- b 親側の過干渉の尺度 7項目  
IN 子どもが学校や遊びでなにをしていたかを、いつも知ろうとする。  
HC 子どもに、どんなふうに行動したらよいかを、いつもいいきかせている。  
IN 外のできごとを、なんでも話さないという。

- ⑥ a 子ども側の強制の尺度 6項目  
EN 私が言うことをきかないと、罰する。  
CO 私の行儀を良くするために、罰を与えるのは正しいと考えている。  
EN 私がしてはいけないことをちょっとでもすると、私を罰する。
- b 親側の強制の尺度 6項目  
EN 子どもが言うことをきかないと、罰する。  
CO 子どもの行儀を良くするために、罰を与えるのは正しいことだと思う。  
EN 子どもがしてはいけないことを少しでもしたときは、罰する。
- ⑦ a 子ども側の共働性の欠如の尺度 4項目  
HD 私と一緒に、いろんな活動をすることはない。  
HD 日曜や休みの日に、一緒に外出したり、ピクニックに行ったりすることは、めったにない。  
RE 私と一緒に仕事をすることはない。
- b 親側の共働性の欠如の尺度 4項目  
HD 子どもと一緒に、いろんな活動をするのはあまりない。  
HD 日曜や休みの日に、子どもと一緒に外出したり、ピクニックに行ったりすることは、あまりない。  
RE 子どもと一緒に仕事をするのはあまりない。
- ⑧ a 子ども側の愛情の尺度 2項目  
RE 私のことを、困った子どもだという。(逆転項目)  
HD 私のことを、しょうがない子どもだけれど、しかたがないと思っている。(逆転項目)
- b 親側の愛情の尺度 2項目  
RE 子どもに、あなたは困った子どもだという。(逆転項目)  
HD しょうがない子どもだけれど、しかたがないと思う。(逆転項目)
- ⑨ a 子ども側の不快感の表出の尺度 4項目  
RE 親を困らせるようなことを私がすると、よく腹をたてる。  
CG 私が親のすすめたとおりにしないと、気を悪くする。  
WR 私が親をおこらせると、冷たい、そっけない調子で話す。
- b 親側の不快感の表出の尺度 4項目  
RE 私を困らせるようなことを子どもがすると、腹をたてることがよくある。  
CG 子どもが私のすすめたとおりにしないと、いい気持ちがしない。  
WR 子どものことで腹がたつと、子どもに、そっけない調子で話す。
- ⑩ a 子ども側の自律性の尊重の尺度 1項目  
AI なにをするかを決めるとき、できるだけ私に選ばせてくれる。

### 親子関係の相互認知Ⅲ（辻岡・小高）

- b 親側の自律性の尊重の尺度 1項目  
AI なにをやるかを決めるときは、できるだけ子どもに選ばず。
- ⑩ a 子ども側の子離れ不全の尺度 3項目  
ID 友達と出かけるよりは、私と一緒に家にいる方が好きだ。  
ID ほかのだれよりも私と一緒にいたがる。  
ID 私の暇なときはたいてい、一緒に過ごして欲しいと思っている。
- b 親側の子離れ不全の尺度 3項目  
ID 私の友達と出かけるよりは、子どもと家にいる方が好きだ。  
ID ほかのだれよりも子どもと一緒にいたい。  
ID 子どもの暇なときはたいてい、一緒に過ごしていたいと思う。
- ⑪ a 子ども側の親の返礼期待にもとづいた利己的な甘やかしの尺度 2項目  
LD 私がものを欲しがると、だめだとは言えないようだ。  
CG 親を愛しているのなら、親が望んでいるとおりにしなければいけないという。
- b 親側の親の返礼期待にもとづいた利己的な甘やかしの尺度 2項目  
LD 子どもがものを欲しがると、だめだと言えない。  
CG 親を愛しているのなら、親が望んでいるとおりにしなければいけないという。

## II 項目分析の結果

延長因子分析により、項目変量の因子パターンを求め、次いで、因子の真実性の原理を満足させ、かつ論理的妥当性を満たしうる項目を1尺度につき、10項目を選択した。因子の解釈は、尺度間因子分析によって得た準拠構造行列と項目分析により、最終的に選択された項目によって解釈することにした。（Table 3-1～Table 3-8 を参照）

### (1) 子ども側の情緒的支持の因子 ES-C

Table 1の準拠構造によると、この因子は子ども側の受容の尺度（.606）、自律性の尊重の尺度（.476）、子離れ不全の尺度（.327）、に正の負荷を示し、共働性の欠如の尺度（-.477）に負の負荷を示している。このことからわかるように、この因子は愛情—拒否の対極構造をもっていることがわかる。そして、この因子は親側の尺度に負荷しない。最高でも親側の愛情の尺度に.270負荷するだけである。また、項目分析によって選択された項目からもわかるように、この因子は子ども側の情緒的支持の因子と名付けることができる。

### (2) 親側の情緒的支持の因子 ES-P

Table 1の準拠構造によると、この因子は親側の受容の尺度（.743）、自律性の尊重の尺度

Table 3-1 子ども側の情緒的支持の因子 (ES-C)

項目番号	略号	一次因子	ES-C	ES-P	CO-C	CO-P	EA-C	EA-P	ID		
1	159	AI	なにをするかを決める時、できるだけ私に選ばせてくれる。		693	111	099	085	339	-008	-351
2	93	ES	いつも私の考えや意見に耳を傾けてくれる。		615	-073	-135	-064	048	077	047
3	170	AC	うちで私と楽しい時間を過ごす。		603	-145	039	-044	-105	-006	154
4	53	AC	私と話し合いをするのがすきだ。		593	-169	-015	041	033	-043	162
5	27	AC	たいてい、暖かい親しみのある調子で、私に話しかける。		584	-031	-031	-139	-084	041	074
6	144	ES	私がかまっているときには元気づけてくれる。		582	-076	-004	-022	009	-050	204
7	92	AC	私の心が動揺しているときは、しずめてくれる。		579	-089	013	034	054	-027	118
8	106	PI	ものごとの原因や理由について、私とながく話し合うことがよくある。		569	-101	053	085	-094	-037	050
9	1	ES	心配ごとをじっくり聞いてくれるので気持ちに楽になる。		546	006	-015	-019	-119	055	107
10	68	ES	私と一緒に仕事をするとき私意見の意見を聞いてくれる。		497	-039	-142	010	-122	112	-054
			平均		586	-059	-014	-003	-004	011	051
因子的真実性係数 = 994											

Table 3-2 親側の情緒的支持の因子 (ES-P)

項目番号	略号	一次因子	ES-C	ES-P	CO-C	CO-P	EA-C	EA-P	ID		
1	367	AI	なにをするかを決める時は、できるだけ子供に選ばす。		-093	652	072	-015	273	-086	-202
2	301	ES	いつも子供の考えや意見を聞く。		033	627	-055	029	045	015	125
3	378	AC	うちで子供と楽しい時間を過ごす。		005	508	039	033	-040	031	258
4	261	AC	子供と話し合いをするのがすきだ。		062	488	030	129	-121	075	146
5	235	AC	たいてい、暖かい親しみのある調子で、子供に話しかける。		109	519	-199	130	075	-011	200
6	352	ES	子供がかまっているときには元気づけてやる。		-014	362	-014	091	-167	-094	153
7	300	AC	子供の心が動揺しているときは、静めてやる。		-011	520	-022	015	-043	-028	178
8	314	PI	ものごとの原因や理由について、子供とながく話し合うことがよくある。		-009	424	081	004	-106	-023	164
9	209	ES	子供の心配ごとを聞いて、気持ちに楽にしてやる。		-039	479	090	-013	-146	-030	138
10	276	ES	子供と一緒に仕事をするとき子供の意見を聞く。		-083	444	-043	072	-087	047	212
			平均		-004	502	-002	047	-032	-010	137
因子的真実性係数 = 962											

親子関係の相互認知Ⅲ（辻岡・小高）

Table 3-3 子ども側の感情的統制の因子（CO-C）

項目番号	略号	一次因子	ES-C	ES-P	CO-C	CO-P	EA-C	EA-P	ID
1	139	WR 私が親をおこらせると、冷たい、そっけない調子で話す。	104	177	733	016	-040	134	-167
2	127	RE 親を困らせるようなことを私がすると、よくはらをたてる。	119	044	726	-101	-161	154	-220
3	115	CG 私が親のすすめたとおりにしないと、気を悪くする	-015	058	674	068	-167	136	-150
4	154	CG 私のために、どれだけ苦労したかをきかせる。	139	090	636	001	159	-032	-105
5	189	CO 「なぜ そんなことをしたのか説明しなさい」としつこく言う。	161	-081	623	-068	067	-155	012
6	125	HD 私のことをいらいらさせる子供だと文句を言う。	-118	-126	598	-024	065	-002	-018
7	141	CG 私のしたことで気を悪くする。	007	075	586	-030	-012	034	-163
8	50	EN 私が言うことをきかないと、罰する。	146	045	578	035	086	-087	-043
9	100	IC 親は自分に、つごうが良くなるように考えを変える。	-214	-015	561	-067	115	-047	005
10	88	RE いつも私をせめたてる。	-220	-057	552	053	222	-075	021
平均			011	021	627	-012	033	006	-083
因子の真实性係数 = 991									

Table 3-4 親側の感情的統制の因子（CO-P）

項目番号	略号	一次因子	ES-C	ES-P	CO-C	CO-P	EA-C	EA-P	ID
1	347	WR 子供のことで腹がたつと、子供に、そっけない調子で話す。	128	038	085	566	-157	037	-330
2	335	RE 私を困らせるようなことを子供がすると、腹をたてることがよくある。	098	062	079	666	-042	-123	-286
3	323	CG 子供が私のすすめたとおりにしないと、いい気持がしない。	145	051	105	555	-020	-034	-332
4	362	CG 子供のために、どれだけ苦労したかをきかせる。	-095	058	-036	456	012	132	143
5	397	CO 「なぜ そんなことをしたのか説明しなさい」としつこく言う。	-055	-022	-175	457	-014	-103	138
6	333	HD いらいらさせる子供だと文句を言う。	-089	-196	004	444	000	040	015
7	349	CG 子供のしたことで気を悪くする。	005	-051	-040	461	001	041	-056
8	258	EN 子供が言うことをきかないと、罰する。	-120	051	-002	442	098	-086	039
9	308	IC 自分につごうが良くなるように、考えを変えることもある。	010	-089	-120	499	067	035	-096
10	296	RE 子供をせめたてる。	-087	-152	-084	468	-022	084	-030
平均			-006	-025	-018	503	-008	002	-080
因子の真实性係数 = 981									

(.537) に正の負荷を示している。そして、この因子は子ども側の尺度に負荷しない。最高でも子ども側の子離れ不全の尺度に  $-.246$  負荷するだけである。また、項目分析によって選択された項目からもわかるように、この因子は親側の情緒的支持の因子と名付けることができる。

### (3) 子ども側の感情的統制の因子 CO-C

Table 1 の準拠構造によると、この因子は子ども側の拒否の尺度 (.715)、不快感情の表出の尺度 (.670)、強制的尺度 (.481)、一貫しないしつけの尺度 (.471)、過干渉の尺度 (.335) に正の負荷を示しており、愛情の尺度 ( $-.379$ ) に負の負荷を示している。そして、この因子は親側の尺度に負荷しない。最高でも親側の愛情の尺度に  $.152$  負荷するだけである。また、項目分析によって選択された項目からもわかるように、この因子は子ども側の感情的統制の因子と名付けることができる。

### (4) 親側の感情的統制の因子 CO-P

Table 1 の準拠構造によると、この因子は親側の拒否の尺度 (.742)、不快感情の表出の尺度 (.641)、強制的尺度 (.487)、一貫しないしつけの尺度 (.502) に正の負荷を示しており、愛情の尺度 ( $-.430$ ) に負の負荷を示している。そしてこの因子は子ども側の尺度に負荷しない。最高でも子ども側の子離れ不全の尺度に  $-.152$  負荷するだけである。また、項目分析によって選択された項目からもわかるように、この因子は親側の感情的統制の因子と名付けることができる。

### (5) 子ども側の放任の因子 EA-C

Table 1 の準拠構造によると、この因子は子ども側の返礼期待にもとづいた利己的な甘やかしの尺度 (.498)、自由放任の尺度 (.483)、共働性の欠如の尺度 (.367) に正の負荷を示している。しかしながら、共働性の欠如の尺度、利己的な甘やかしの尺度、に含まれる項目の数は少ないために明確な因子の解釈は困難である。そこで、項目分析によって選択された Table 3-5 の尺度項目をみると、「私がものを欲しがると、だめだと言えないようだ。」「私のいいなりになる。」「私が望むままの自由を与えてくれる。」「私が良くないことをいろいろしても、見逃す。」など、親の甘い養育態度が伺われる。また、「私の行きたいところなら、どこへでも何もきかないで行かせてくれる。」「夜でも、私が行きたいときはいつでも外出させてくれる。」など、親の放任的な、あるいは、親のしまりのない養育態度があらわれているように思われる。当初、この因子を子どもの自律性を重んじることを表す因子であると考えたが、中学2、3年の青年期初期でのこのような親の養育態度は自律性を重んじるというよりはむしろ、親のいいかげんな養育態度の表れであると思われる。以上を総合的に解釈すると、この因子は子ども側の親のしまりのない監督を表す子ども側の放任の因子と考えられる。また、この因子は Schaefer のいう Firm control

親子関係の相互認知Ⅲ（辻岡・小高）

Table 3-5 子ども側の放任の因子（EA-C）

項目番号	略号	一次因子	ES-C	ES-P	CO-C	CO-P	EA-C	EA-P	ID			
1	135	LD 私がものを欲しがると、だめだとは言えないようだ。	-029	-120	-077	-004	526	-090	244			
2	97	AU 私がしたいことはどんなことでもさせてくれる。	246	003	-026	088	519	081	-164			
3	45	EA 私の行きたいところなら、どこへでも何もきかないで行かせてくれる。	083	054	078	-066	467	006	-106			
4	32	EA 私が望むままの自由を与えてくれる。	239	057	-199	058	383	092	-153			
5	84	AU 夜でも、私が行きたいときはいつでも外出させてくれる。	039	-087	096	050	366	130	-049			
6	83	NO 私が与えられた仕事をしなくても、やかましく言わない。	-017	051	-068	143	363	035	-104			
7	6	AU 好きなだけ外へ行かせてくれる。	167	031	-018	031	352	090	-168			
8	96	NO 私が良くないことをいろいろしても、見逃す。	-158	027	065	059	323	115	-085			
9	109	LD 私のいいなりになる。	-029	-139	121	169	268	037	088			
10	200	LD 親をときふせて、私の考えどおりにさせやすい。	-016	138	066	-120	254	-079	033			
因子的真実性係数 = 978			平均			053	001	004	041	382	042	-046

Table 3-6 親側の放任の因子（EA-P）

項目番号	略号	一次因子	ES-C	ES-P	CO-C	CO-P	EA-C	EA-P	ID			
1	343	LD 子供がものを欲しがると、だめだと言えない。	083	-078	060	-057	-151	717	289			
2	305	AU 子供がしたいことはどんなことでもさせている。	-113	180	-069	-007	095	502	131			
3	253	AU 子供の行きたいところへ、何もきかず、行かせてやる	-154	050	023	-057	076	467	-012			
4	240	EA 子供が望むままの自由を与えている。	-095	077	-047	-044	111	512	-087			
5	292	EA 夜でも、子供が行きたいときは、いつでも外出させてやる。	-118	-006	063	002	091	375	-079			
6	291	NO 子供が与えられた仕事をしなくても、やかましく言わない。	-118	-061	034	-202	037	340	012			
7	214	AU 子供の好きなだけ、何回でも外出させる。	-016	083	144	-103	091	314	-052			
8	304	NO 子供が良くないことをいろいろしても、見逃す。	012	-031	-072	154	071	329	-011			
9	317	LD 子供のいいなりになるほうだ。	-033	-001	-003	007	-047	398	117			
10	408	LD 子供にときふせられて、子供の考えどおりになりやすい。	-014	028	-021	153	-078	297	112			
因子的真実性係数 = 986			平均			-057	024	011	-015	030	425	042

対 Lax control に類似している。

#### (6) 親側の放任の因子 EA-P

Table 1 の準拠構造によると、この因子は親側の利己的な甘やかしの尺度 (.634)、自由放任の尺度 (.534) に正の負荷を示している。しかしながら、利己的な甘やかしの尺度、に含まれる項目の数は少ないために明確な因子の解釈は困難である。そこで先ほどと同様、項目分析によって選択された項目を参考にして、この因子の命名を行いたい。

項目分析によって選択された Table 3-6 の尺度項目をみると、「子どもがものを欲しがると、だめだと言えない。」「子どものいいなりになる。」「子どもが望むままの自由を与えている。」「子どもが良くないことをいろいろしても、見逃す。」など、親の甘い養育態度が伺われる。また、「子どもの行きたいところなら、どこへでも何もきかないで行かせてやる。」「夜でも、子どもが行きたいときはいつでも外出させてやる。」など、親の放任的な、あるいは親のしまりのない養育態度があらわれているように思われる。

以上を総合的に解釈すると、この因子は、先ほどと同様に、親側の親のしまりのない監督を表す親側の放任の因子と考えられる。また、この因子は Schaefer のいう Firm control 対 Lax control に、類似しているように思われる。

#### (7) 同一化の因子 ID

Table 1 の準拠構造によると、この因子は子ども側の子離れ不全の尺度 (.370)、過干渉の尺度 (.326)、親側の子離れ不全の尺度 (.477)、親側の過干渉の尺度 (.418) に正の負荷を示している。しかしながら、子離れ不全の尺度に含まれる項目の数は少ないために明確な因子の解釈は困難である。そこで、項目分析によって選択された Table 3-7、Table 3-8 の尺度項目をみると、子ども側と親側の項目に対して「私の暇なときはたいてい、一緒に過ごして欲しい思っている。」「子どもの暇なときはたいてい、一緒に過ごしていたいと思う。」「友達と出かけるよりは、私と一緒に家にいる方が好きだ。」「私の友達と出かけるよりは、子どもと家にいる方が好きだ。」「ほかのだれよりも私と一緒にいたがる。」「ほかのだれよりも子どもと一緒にいたい。」というように、「……と一緒に……」といった、子どもへの所有欲を示す項目が多い。また、「私が学校や遊びでなにをしたかを、いつも知ろうとする。」「子どもが学校や遊びでなにをしていたかを、いつも知ろうとする。」「私が外で誰と一緒にいたかを知りたがる。」「子どもが外で誰と一緒にいるかを知っておきたい。」「宿題をやるようにとやかましく言うことはない。」(逆転項目) など、子どもに関与することを示す項目が含まれている。さらに、この因子は、他の6つの因子とは異なり、親と子どもに同次元上に現れる因子であり、個々の臨床的なケースは別として、一般的には親と子どもとの認知ギャップは少ない。すなわち、親が子離れができないと感じるほど、また、子どもも親は子離れができていないのだと認知していることを示している。

親子関係の相互認知Ⅲ（辻岡・小高）

Table 3-7 同一化の因子（ID）（子ども側）

項目番号	略号	一次因子	ES-C	ES-P	CO-C	CO-P	EA-C	EA-P	ID	
1	33	IN 外のできごとをなんでも話しなさいと言う。	043	-236	228	-119	047	-238	474	
2	137	ID 私の暇なときはたいてい、一緒に過ごして欲しいと思っている。	267	-300	154	-120	105	001	448	
3	69	ID 友達と出かけるよりは、私と一緒に家にいる方が好きだ。	347	-248	163	-087	088	-014	453	
4	20	IN 私が学校や遊びでなにをしたかを、いつも知ろうとする。	145	-178	102	-140	-032	-169	455	
5	85	IN 私が友達と何を話し合っていたかを、こまかくたずねる。	036	-261	306	-065	058	-063	314	
6	111	ID ほかのだれよりも私と一緒にいたがる。	370	-197	311	-236	320	-157	275	
7	*	31 NO 宿題をやるようにとやかましく言うことはない。	-213	-023	025	058	-141	-107	275	
8	59	IN 私が外で誰と一緒にいたかを知りたがる。	109	-135	273	018	-115	-094	283	
9	72	IN 私が外でなにをしていたかを、他の人にたずねる。	-132	-065	253	-023	199	-202	240	
10	149	PO 私の生活に強くは入りこんでくる。	067	-073	386	-114	184	-170	231	
因子的真実性係数 = 802			平均	104	-172	220	-083	071	-121	343

Table 3-8 同一化の因子（ID）（親側）

項目番号	略号	一次因子	ES-C	ES-P	CO-C	CO-P	EA-C	EA-P	ID	
1	241	IN 外のできごとを、なんでも話しなさいと言う。	-098	122	-193	135	-042	001	498	
2	345	ID 子供の暇なときはたいてい、一緒に過ごしてたいと思う。	-041	188	-109	-022	-012	140	541	
3	277	ID 私の友達と出かけるよりは、子供と家にいる方が好きだ。	-130	209	-103	-154	-066	040	533	
4	228	IN 子供が学校や遊びでなにをしていたかを、いつも知ろうとする。	-163	151	-098	044	095	-077	520	
5	293	IN 子供が友達と何を話し合っていたかを、詳しくたずねる。	-113	-063	-054	203	085	-004	425	
6	319	ID ほかのだれよりも子供と一緒にいたい。	-045	022	-194	057	-101	214	508	
7	*	239 NO 宿題をやるようにとやかましく言うことはない。	-107	-171	-032	230	047	-175	257	
8	267	IN 子供が外で誰と一緒にいるかを知っておきたい。	-067	306	-077	158	-141	-045	276	
9	280	IN 子供が外でなにをしていたかを、他の人にたずねる。	-200	-107	-114	109	015	016	234	
10	357	PO 子供の生活に強くかかわりあっている。	-081	193	-118	171	-083	035	226	
因子的真実性係数 = 939			平均	-105	085	-109	093	-020	014	402

ところで、辻岡・山本(1977a)が同一化の因子について『「親が自分の子どもを己が分身として強い一体感を持ち、子どもを自己の延長として感じている」という親の行動傾向を代表するもの』と定義しているが、この因子は辻岡らの言う同一化の因子と非常に酷似している。

以上からこれらを総合的に解釈して、この因子をやはり、同一化の因子と命名した。

さて、上記から見いだされた因子をみると親と子どもでは、ほぼ、類似した構造を持っていると言えよう。しかし、細部をみると、多少、異なっている。例えば、子ども側の情緒的支持の因子と親側の情緒的支持の因子は、共働性の欠如の尺度は子ども側には高くマイナスに負荷しているが(-.477)、親側では負荷していない(-.103)。また、子離れ不全の尺度は、子どもに比べ、低い値である(.327, .201)。すなわち、子どもは、親が子どもと一緒に物事を行わないことは子どもにとっては親の愛情がない現れであると認知しているのに対し、親はそうのように認知していない。また、子どもは、親の子離れできないことを、親の愛情の一部であると認知しているのに対し、親にとっては、愛情というよりはむしろ、親と子どもとの絆であると認知しているようである。感情的統制の因子についても、過干渉の尺度は子ども側には高く負荷する(.335)が、親側には弱い負荷しか示さず(.232)、むしろ、同一化の因子に高く負荷している(.418)。すなわち、子どもにとっては、親から過度に干渉されることは、心理的に圧力のかかった統制であると認知しているのに対し、親は子どもに過度に干渉することは心理的に圧力のかかった統制とは感じておらず、子どもとの一体感の現れであると認知している。

以上、子ども側3因子、親側3因子の6因子からそれぞれ内容的には同一の10項目が選択され、親と子どもに共通して現れた同一化の因子に対しても子どもと親に関して、各々10項目が選択された。結局、合計80項目の7因子尺度(ただし、ID尺度は親用、子ども用各10項目からなる。)が構成された。なお、Table 4は、構成尺度間相関、及び、因子的真実性係数(coefficient of factor-trueness)(辻岡 1964)、共通性、因子的妥当性係数、内的整合性の評価指標であるCronbachの $\alpha$ 係数が示されている。これらの評価指標によれば、7因子尺度の因子的真実性及び因子的妥当性、及び、内的整合性に関してはほぼ満足した結果であるといえよう。

### Ⅲ 二次因子分析の解釈

Table 2の因子間相関行列をみると、一次の7因子はかなり斜交していることがわかる。これらをさらに詳細に検討するために、この因子間相関行列を主成分分析し、Vaimax回転した結果から、親子関係の相互認知についての二次因子水準における機能的構造を検討した。

Table 5は主成分分析後のVarimax解である。また、これらの三水準の因子間の階層構造図はFig. 1に示されている。

#### 二次第1因子 受容の因子（AC 因子）

この因子は子ども側の情緒的支持の因子（.806）、親側の情緒的支持の因子（.682）、同一化の因子（.549）に大きく負荷している。すなわち、子どもに対して、情緒的に支持していると親が感じるに従って、また子どもも親が情緒的に支持してくれていると感じるに従って、親と子の同一化傾向は強くなることを示している。このことから、この因子は親子間の受容（Acceptance）の次元を代表すると考えられる。

#### 二次第2因子 二次の感情的統制の因子（CO 因子）

この因子は子ども側と親側の感情的統制の因子に高く負荷し（.804, .704）、同一化の因子に対しても、高く負荷する（.639）すなわち、子どもに対して、感情的に統制的であると親が感じるに従って、また子どもも親が感情的に統制していると感じるに従って、親と子の同一化傾向は強くなることを示している。この因子は親子間の感情的統制（Emotional Control）の次元を代表するものと考えられる。

#### 二次第3因子 二次の放任の因子（EA 因子）

この因子は子ども側と親側の放任の因子に高く負荷する（.815, .799）ことからこの因子は親子間の放任（Extreme Autonomy）の次元を代表するものと考えられる。

このことを図に示したのが Fig. 2-1 から Fig. 2-3 である。特に Fig. 2-2 をみると、ID 因子（同一化の因子）は AC 因子（受容の因子）と CO 因子（感情的統制の因子）の中間にあり、一次の同一化の因子が独立した2因子（受容の因子と感情的統制の因子）の媒介となっていることがうかがわれる。

**Table 4** 同一化因子の尺度を親と子どもに分けたときの構成尺度間相関, 因子的真実性係数, 因子的妥当性係数, 共通性,  $\alpha$  係数

	子ども側の尺度				親側の尺度				Factor Trueness	Factor Validity	Commu- nality	$\alpha$ Coefficient	
	ES	ID	CO	EA	ES	ID	CO	EA					
子 ど も 側	情緒的支持 ES		132	- 288	077	180	125	- 059	- 143	994	889	801	854
	同一化 ID	132		388	045	147	346	054	- 046	802	656	669	744
	感情的統制 CO	- 268	388		- 007	093	066	160	038	991	934	888	837
	放任 AU	077	045	- 007		- 014	014	060	240	978	723	546	730
親 側	情緒的支持 ES	180	147	093	- 014		464	- 057	- 027	962	910	895	792
	同一化 ID	125	346	066	014	464		223	063	939	764	661	704
	感情的統制 CO	- 059	054	160	060	- 057	223		007	981	889	822	719
	放任 AU	- 143	- 046	038	240	- 027	063	007		986	794	648	743

Decimal points omitted.

**Table 5** 二次のバリマックス因子負荷行列

一次因子	二次因子	感情的		
		受容	統制	放任
子ども側の情緒的支持	ES-C	806	- 221	- 060
親側の情緒的支持	ES-P	682	096	- 034
子ども側の感情的統制	CO-C	- 285	804	- 060
親側の感情的統制	CO-P	062	704	019
子ども側の放任	EA-C	105	042	815
親側の放任	EA-P	- 176	- 029	799
同一化	ID	549	639	112

Decimal points omitted.

親子関係の相互認知Ⅲ (辻岡・小高)

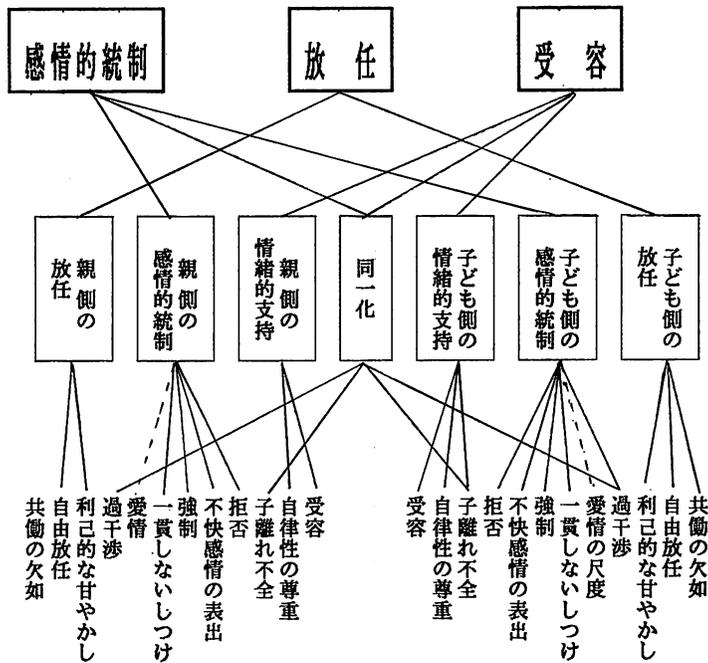


Fig. 1 親子関係の階層図 (ただし、右側は子ども側の尺度、左側は親側の尺度)

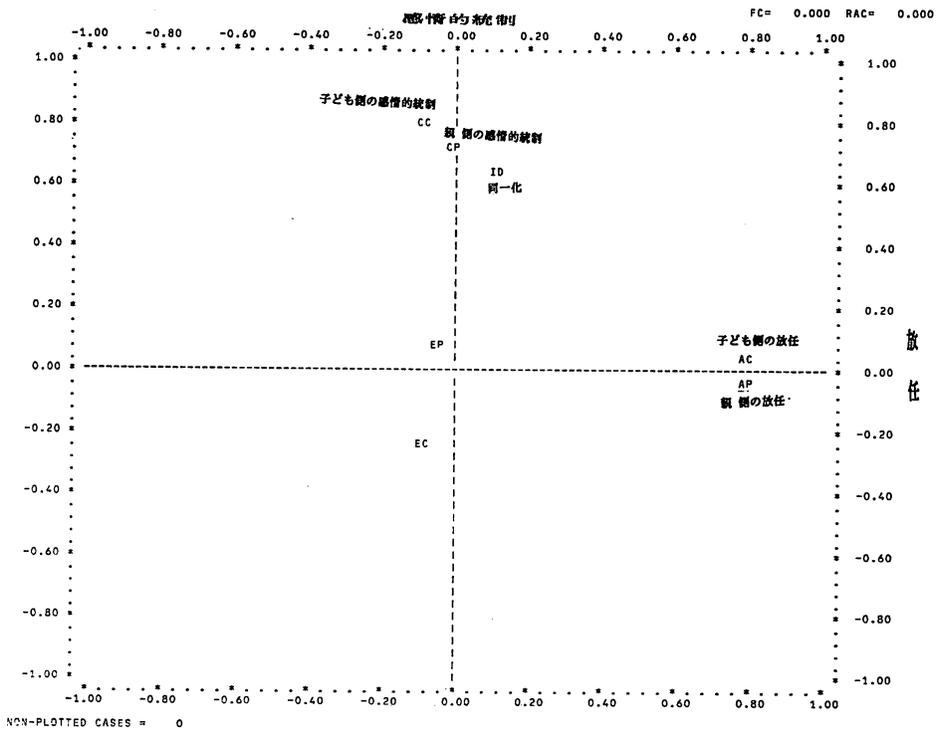


Fig. 2 - 1 二次因子分析のプロット図

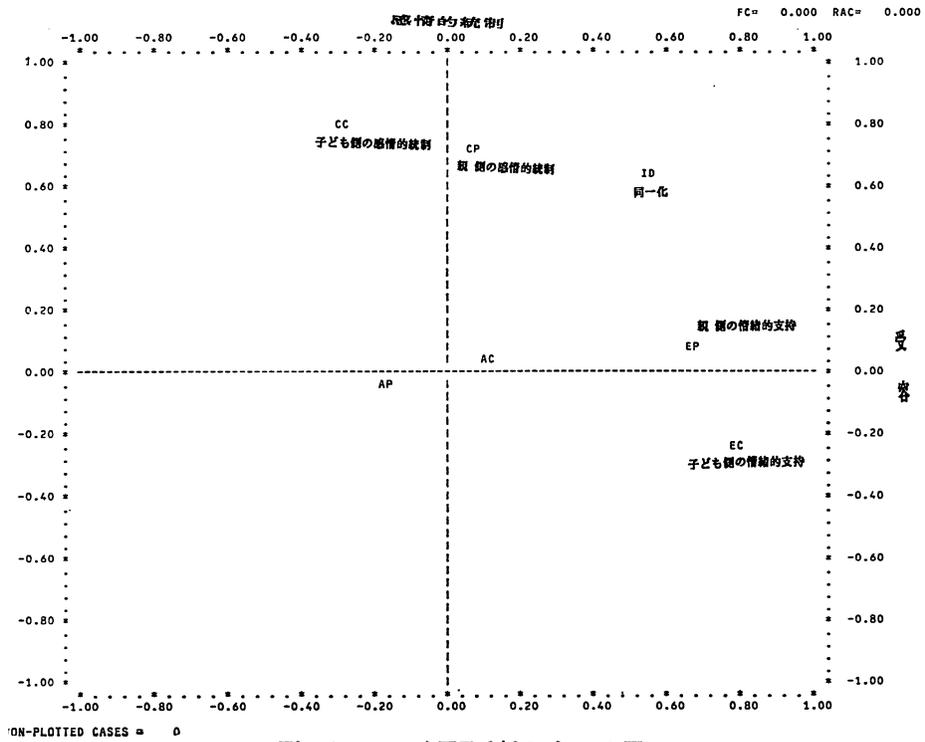


Fig. 2-2 二次因子分析のプロット図

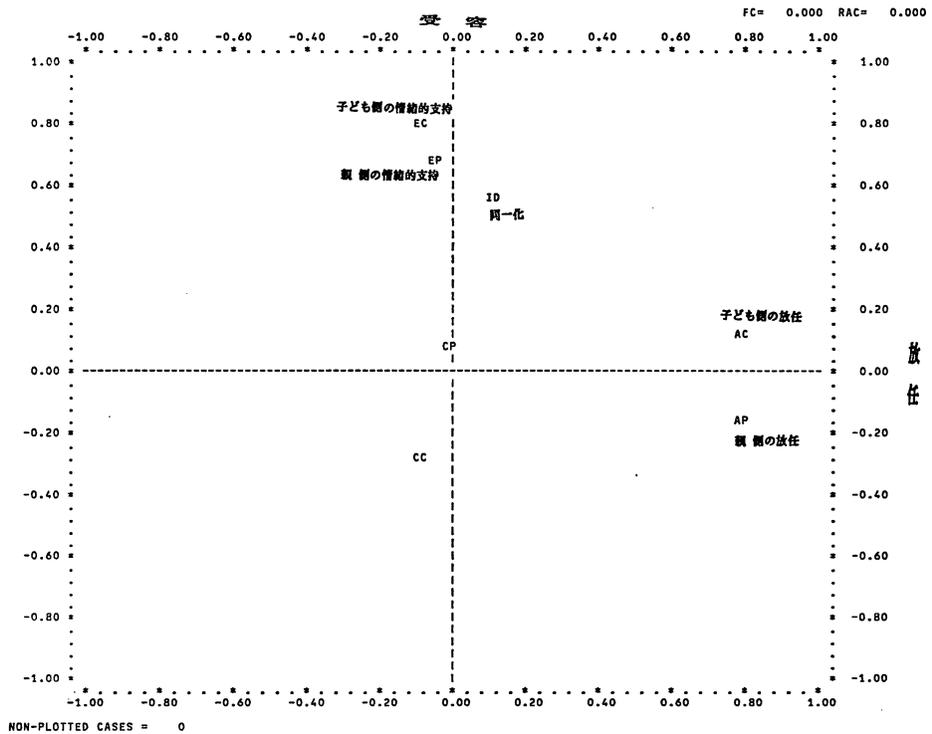


Fig. 2-3 二次因子分析のプロット図

## 〔考 察〕

以上の分析を通じて、親子関係における「子どもに対する親の行動」の相互認知においては、基本的には7個の一次因子が存在することが確認された。前回の分析と同じく、今回抽出されたID因子も、親と子の間において同次元に現れ、それに関する項目は子どもへの所有欲や子どもへの関与を示す項目が多く含まれていた。先の辻岡・山本（1977a）の研究では、「ID因子こそは親と子を結ぶ意識下の共通感情に根ざしたへその緒、いわゆる“分身的愛”の強度を測定するものである」と述べているが、今回の新しい別の資料の分析結果は、これらの考え方をさらに支持するものと思われる。Table 2の一次因子間相関の結果からわかるように、子どもにとっては、「親が子どもを感情的に統制すること」と「子どもを情緒的に支持すること」とは負の相関を示しており、両者を逆方向で認知していることがわかる。すなわち、親が子どもを感情的に統制すればするほど、子どもは情緒的には支持してくれないと感じるということである。一方、親にとっては、「子どもを感情的に統制すること」と、「子どもを情緒的に支持すること」とは独立したものと考えている。しかし、ID因子を介することによって、この2つの関係は正相関の方向にあると思われる。つまり、親の子への分身的愛が強くなればなるほど、また、子どもがそのように認知するほど、子への愛情は強くなり、感情的に統制する傾向も強くなり、また子どもの方もそのように認知するのである。さらに、Table 4のID因子に関する親用と子ども用の尺度をみると、子ども側のID因子と親側のID因子は中程度の相関（.346）を示しているが、子ども側の同一化に関する尺度は子ども側の感情的統制に関する尺度と中程度の正の相関（.388）を示しているのに対し、親側の同一化に関する尺度は子ども側の情緒的支持に関する尺度と比較的高い正の相関（.464）を示している。すなわち、親の分身的愛は愛情の一部であると認知しているのに対し、子どもの方では親の分身的愛は感情的に統制するものであると認知していることがわかる。また、二次因子分析の結果において述べたように、ID因子（同一化の因子）はAC因子軸（受容の因子）とCO因子軸（感情的統制の因子）との間に位置し、同一化の因子が独立した2つの因子（受容の因子と二次の感情的統制の因子）の媒介となっている。すなわち、感情的に圧力をかけて子どもを統制する親の養育態度と子どもを受容するということは、独立しており、一見、別々のものであると思われるが、この両者は親子関係における感情の矛盾的併存を示すものと思われる。そして、このことは先の辻岡・小高（1991）の研究をも支持すると思われる。

Erikson, E. H. は、青年期の発達課題は同一性の獲得と同一性の拡散感の克服であると考えたが、野沢（1984）はこれをふまえて、両親から分離し、安定した自我同一性を確立するためには、人格発達のそれぞれの時期の発達課題を両親のかかわりあいの中で達成し、経過することが必要であると考えた。そして、過剰な親への同一化、もしくは、その逆の場合、安定した自我同

一性を形成することは困難になると述べている。また、小此木(1982)は、「親離れについて考える上で大切なのは、問題になっている子どもがその年齢段階で、どのくらいの、どんな親離れができていないかであり、親離れについて考えるためには、それぞれのライフサイクル、ないし精神発達の各段階で、その子どもが、その年齢の段階において社会・文化から期待される一定の親離れの課題をいかに達成しているかが問われるのである。」と述べている。さらに、彼は、フロイトの言う「赤ん坊陛下」を引用し、フロイトのその言葉が現代の親たちの子どもに向けるナルシスティックな気持ちを予言しており、こうした両親の子どもっぽい愛情は両親自身の幼穉の自己愛の再生以外の何ものでもないと述べている。筆者らは、本研究で出現したID因子が、こうした親離れ、子離れが適切になされているかどうかを測定する可能性を示すものであると考える。分身的愛情が過度に強すぎたり、弱すぎたりすると、社会、文化から期待されるような、年齢に応じた親離れ、子離れが困難になると思われる。特に、親の分身的愛情が強すぎた場合、両親自身の自己愛の再生になってしまい、子どもに、ナルシスティックな気持ちを押し付けがちなように思われる。

最後に、今回の研究においては、いくつかの問題点が残るように思われる。先の辻岡・山本(1976)では、子ども側の資料においては息子→父、娘→父、息子→母、娘→母、の4グループ間について検討されており、4群に共通して選択されている項目をさらに選び出すという作業を行っている。しかし、今回の場合、親子共通の被験者の数が少なかったため、子→親、親→子の2グループ間での転移可能性しか検討することができなかった。このことは、今後の研究によって解決しなければならないと思われる。

## 〔要 約〕

1. プロクラステス法を用いた確認的因子分析法に基づいて、子どもと親に、安定かつ、一貫的に存在することが確認された7個の一次因子を測定しうる尺度が構成された。これらの7尺度は、子ども側の情緒的支持の因子、親側の情緒的支持の因子、子ども側の感情的統制の因子、親側の感情的統制の因子、子ども側の放任の因子、親側の放任の因子、及び、親と子どもとに同一次元上に現れた同一化の因子であった。

2. 延長因子分析法により、これら7個の一次因子に対する項目変量の因子パターン値が求められ、因子の真実性の原理に基づく項目分析により、7因子尺度が構成された。構成尺度の因子的真実性係数は0.802~0.994の範囲で高く、尺度の内的整合性の測度である $\alpha$ 係数も満足すべき水準であった。

3. 一次因子関相行列の二次因子分析により、受容の因子、二次の感情的統制の因子、二次の放任の因子が抽出された。

4. 一次因子としての同一化因子の重要性が考察された。

参 考 文 献

- 小嶋秀夫 1969 親の行動の質問紙の項目水準におけるバッテリー間因子分析 金沢大学教育学部紀要（人文科学編），18，55-70.
- Kojima H. 1975 Inter-battery factor analysis of parents' and children's reports of parental behavior. *Japanese Psychological Research*, 17 (1), 33-48.
- 小此木啓吾 1982 親離れを考える 教育と医学, 30, 212-223.
- 野沢栄司 1984 思春期の危機——親との抗争——精神科 MOOK No. 6, 50-56.
- Renson, G. J., Shaefer, E. S. & Levy B. I 1968 Cross-national validity of a spherical conceptual model for parent behavior. *Child Development*, 39, 1229-1235.
- Schaefer, E. S. 1965a Children's reports of parental behavior: An inventory. *Child Development*, 36, 413-424.
- Schaefer, E. S. 1965b A configurational analysis of children's reports of parent behavior. *Journal of Consulting Psychology*, 29, 552-557.
- Schluderman, E. & Schludermann, S. 1970 Replicability of factors in Children's Report of Parent Behavior (CRPBI), *The Journal of Psychology*, 76, 239-249.
- Schwarz, J. C., Barton-Henry, M. L., Prunzinsky, T. 1985 Assessing child-rearing behavior: A comparison of ratings made by mother, father, child, and sibling on the CRPBI. *Child Development*, 56, 462-479
- 品川不二郎・品川孝子 1958 田研式親子関係診断テストの手引 日本文化科学社
- 辻岡美延 1964 テスト尺度構成における新しい原理——因子的真实性——心理学評論, 8, 82-90.
- 辻岡美延・小高恵 1991 親子関係の相互認知Ⅱ——小嶋氏の前資料の再分析—— 関西大学社会学部紀要（23（1）, 167-192
- 辻岡美延・清水和秋 1975 項目分析による項目統計量と構成尺度の統計量——因子的真实性係数と因子的妥当性——関西大学社会学部紀要, 7（1）, 107-120.
- 辻岡美延・東村高良 1975 因子分析における因子数の決定——Scree 基準の客観化のためのコンピュータプログラム——関西大学社会学部紀要, 6（1）, 35-45.
- 辻岡美延・藤村和久 1975 確認的因子分析における検査尺度構成（斜交因子解のための Rotoplot 法）関西大学社会学部紀要, 6（1）, 46-52.
- 辻岡美延・山本吉廣 1975 確認的因子分析における行動予測の研究（親子関係の4次元——Schaefer の CR-PBI の分析） 関西大学社会学部紀要, 7（1）, 146-160.
- 辻岡美延・山本吉廣 1976 親子関係診断尺度 EICA の作成——因子的真实性の原理による項目分析——関西大学社会学部紀要, 7（2）, 1-14.
- 辻岡美延・山本吉廣 1977a 親子関係の相互認知——小嶋氏の前資料の一分析——教育心理学研究, 25,（1）, 18-29.
- 辻岡美延・山本吉廣 1977b 子どもの出生順位による親子関係と人格形成 関西大学社会学部紀要, 8（1）, 103-120.
- 森下正康 1982 中学生における親の養育態度と対人特性の同一視 教育心理学研究, 30（2）, 52-56.
- 森下正康 1990 親の養育態度と子どもの自己受容の発達 日本教育心理学会第32回総会発表論文集, p. 157.